

平成23年2月28日現在

研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007年度～2009年度
 課題番号：19720030
 研究課題名（和文） 敦煌唐代前半期壁画の総合的研究

研究課題名（英文） On the Dunhuang Mural Paintings in the First Half of the Tang Dynasty.

研究代表者 西林孝浩（NISHIBAYASHI Takahiro）
 立命館大学 文学部 准教授
 研究者番号：90388083

研究成果の概要（和文）：本研究は、5～14世紀の仏教壁画を有するとされる敦煌莫高窟（甘肅省敦煌市）のうち、特に唐代前半期（ここでは618-780年とする）の壁画群について、その様式や主題解釈といった基礎的研究、及び仏教史等関連分野の先行研究を継承・発展させながら、東洋美術史における位置づけの見直しを行った。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,500,000	0	1,500,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,600,000	630,000	4,230,000

研究分野：美学・美術史

科研費の分科・細目：

キーワード：中国美術、仏教石窟、唐、敦煌壁画、美術史

1. 研究開始当初の背景

敦煌壁画の主題研究は、その基盤を築き上げた松本栄一『敦煌画の研究 図像篇』（1937年）以来、現在に至るまで国内外において活況を呈している。こうした成果は、主題毎に分類された『敦煌石窟全集』（香港・商務印書館、1999年～2005年）に反映されているが、その刊行開始直後から、更に主題解釈の再検討を迫る成果が陸続と発

表されている。とりわけ近年、唐代前半期壁画については、研究の進展が著しい。

こうした主題研究の活況に比較して、敦煌壁画様式のクロノロジー（編年）研究は、『中国石窟』（平凡社・文物出版社、1980～1982年）や、それを補正した『敦煌石窟内容総録』（文物出版社、1996年）以来、時代区分や各壁画の制作年代に大きな見直しや枠組みに変更を迫るものは発表されてい

い。唐代壁画については、長安や洛陽といった中央の寺院壁画が壊滅的な状況にある現在、それを偲ばせる例として詳細な検討を経ないまま敦煌壁画が参照される現状にあり、西域への進出著しかった唐代前半期、7世紀半ばの高昌国攻略以降は、中原からの様々な情報が敦煌に押し寄せ続けたと見なされがちである。

2. 研究の目的

かかる問題意識にたち、特に唐代前半期（ここでは618-780年とする）の敦煌壁画群について、その様式や主題解釈といった基礎的研究、及び仏教史等関連する先行研究を継承・発展させながら、唐代前半期敦煌壁画の位置づけを再検証するのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

(1)近年の敦煌唐代前半期壁画の研究成果を踏まえつつ、図像主題および様式観についての再検証を行った。

(2)敦煌莫高窟を含む唐代前半期美術に関わる資料収集を目的とした現地調査とその資料整理、そして経典や関連文献の精査を並行させつつ、情報収集を行った。

主な調査先は以下の通り。

敦煌莫高窟、龍門石窟、飛来峰石窟、神通寺千仏崖、駝山石窟、雲門山石窟、青州市博物館、北京首都博物館、上海博物館、浙江省博物館、蘇州博物館

(3)唐代美術への外来美術影響という見地から、グプターポストグプター期(4世紀-8世紀初)の彫像作例および壁画作例について重点的に資料収集を行った。

主な調査先・見学先は以下の通り。

ニューデリー国立博物館、アジャンタ石窟、エローラ石窟、アウランガバード石窟、ピタルコーラー石窟、カールラー石窟、ナーシク石窟

4. 研究成果

(1)壁画の保存状態

近年、幾つかの論考で指摘されつつあるが、後代の補修は避けて通れない問題である。とりわけ彩色については、今回の敦煌莫高窟現地調査においても、唐代前半期壁画に、後補の彩色が複数確認され、当初の彩色として、唐代壁画のすべてに全面的信頼をよせるのは極めて危険と判断された。これら後補の時期については、唐代壁画に限っても、壁画完成後、年代を経ない時期のものから、ペリオ等による調査以降のものまで、複数次に及んでいるが、ある一時期に相当範囲にわたる補修がなされているようであり、現在、急速に進展している計測機器を用いた成果も参照しつつ、判断にあたる必要がある。なお、補彩の具体的問題については、拙論「第217窟小考」も参照されたい。

(2)唐代前半期壁画の展開

敦煌壁画の図様については、現在、公となっている唐代前半期に関する限り、比較的、当初の形状を伝えていると判断した。唐代前半期壁画においてまず注目されるのは、新たに登場する壁画主題や構図の多さである。例えば、第321、331、334、340窟の十一面観音、第335窟の対置構図をとる牟度叉闍聖変、第217窟の尊勝仏頂陀羅尼経変、金剛経変、第321窟の十輪経変（※かつて私は、第321窟西壁を金光明最勝王経に基づく壁画と考察したことがあったが、当該壁画については、近年、王惠民氏によ

って十輪経変と指摘された。王氏の説がより妥当と考えられ、自説を撤回する)等があげられる。これらの中に、第217窟や第335窟など、7世紀末～8世紀初の造営になる可能性の極めて高い窟が含まれることは重視すべきであろう。

(3) 年代分期の再検討

また、これら壁画に確認される様式については、例えば、菩薩の身体プロポーション、顔立ち等において、幾つかで看取される共通点・様式の展開が、唐代中原地域の7世紀末～8世紀初における墓室壁画の人物描写の様式展開と符合している点が確認された。

以上の点から、敦煌莫高窟においては、壁画の新主題が、7世紀末～8世紀初に集中して出現しており、敦煌壁画の様式も、その時期にこそ、大きな展開を見せた可能性が高いのである。つまり、敦煌壁画の様式展開を、中原の絵画様式展開とが、密接に結びついていたと想定できるのは、この7世紀末～8世紀初であったと考えられる。

従来の敦煌の唐代前半期の年代分期としては、『敦煌石窟内容総録』(文物出版社、1996年)に代表される初唐(618-704年)・盛唐(705-780年)の分期が一般的な例の1つである。しかし、その区分のあり方は、敦煌壁画の実状に即したものとは言い難く、再検討が為されるべき段階にあると言わなければならない。すなわち、7世紀末頃から、図像そして様式において、かなりの規模をもって急速に展開していることが判明した以上、かかる時期に、一つの画期を設定すべきであると考えるのである。

(4) 7世紀末における壁画展開の史的背景

こうした7世紀末からの敦煌壁画にみら

れる急速かつ大規模な展開について、まず関連が推測されるのは、武後の即位に際して、天下諸州に設置された大雲寺の存在である。やや遅れる史料ではあるが、敦煌文書S.2729『辰年牌子曆』によって788年当時、敦煌にも大雲寺の存在が判明する。また『慧超往五天竺国伝』によると、インドからの帰国の途、開元十五年(727)までに龜茲を訪れた慧超は、当地所在の大雲寺において、もと長安の七宝台寺や莊嚴寺にいた僧達の活躍を記している。こうした事例から、敦煌における大雲寺も、その敦煌地域における厳密な所在地は不明ながら、中原仏教の中継・発信地として、機能していた可能性が高く、仏教美術についても、当該時期の敦煌壁画が、同時期の中原における信仰や美術展開を踏まえていることを考慮するならば、敦煌の大雲寺を通じた伝達の経緯が想定できよう。

更に、如意元年(692)～証聖元年(694)まで、沙州(敦煌)～伊州間に稍竿道が設置され、それ以前は、河西方面から敦煌を経ずに伊州へ向かうのが主要道であったところを、沙州経由となるよう変更されたという交通環境の変化も、こうした仏教情報の流入に、何らかの影響をもたらしていた可能性も考えられよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

西林孝浩「唐代仏教美術におけるインド仏教美術の影響」2008年6月9日、京都大学人文科学研究所「中国絵画の総合的研究」研究班

[図書](計3件)

- ① (共著)『京都に学ぶ(6)京の地宝と考古学』、白川書院、2011年1月15日発行、西林孝浩「第4章広隆寺所蔵《弥勒菩薩半跏像(宝冠弥勒)》と半跏思惟像の源流」執筆、pp. 62-85.
- ② (共著)『京都に学ぶ(1)京の色彩』、白川書院、2009年5月2日発行、西林孝浩「第5章《山水屏風》(京都国立博物館)と「山水の変」」執筆、pp. 76-93.
- ③(共著)『朝日敦煌研究員派遣制度記念誌』、朝日新聞社、2008年3月20日発行、西林孝浩「第217窟小考」執筆、pp. 16-17, 111-115.

※なお③は、2006年に校了したものであり、本科研費による直接の研究成果ではないが、本研究の構想と申請に際しての重要な契機となった論考であるため、敢えてここに記載させていただいた。

[その他]

公開講座「敦煌とシルクロード：変容し発展する仏教美術の世界」湖南省立甲西図書館、2007年11月25日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西林孝浩 (NISHIBAYASHI Takahiro)

立命館大学 文学部 准教授

研究者番号：90388083

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし